

---

# 楽しく生きる為に

すいか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽しく生きる為に

### 【Nコード】

N8267N

### 【作者名】

すいか

### 【あらすじ】

ゼロの使い魔の世界に転生した主人公！  
転生先は平民ではあったものの、  
主人公には主人公故に、誰にも無い特別な能力があった。  
楽しく生きる為に、その能力を使って生きていく。

## 「能力設定」(前書き)

この能力設定についての解説には、物語内のネタバレが多分に含まれて居ます。

なので、物語を読んだ上でご覧いただければ幸いです。

## 「能力設定」

### アトラス

転生者であり、根源に接触した転生能力者でもある。楽天的で、楽しいことが大好きな少年。

アカーシャ  
といった、享樂的ということではなく、過程を楽しむことも出来

る。……出来るはず。

戦闘能力は、アックスマスターや、斧の技などの御蔭で、やたらめったら攻撃力だけが高い（力が強い訳ではない）。

防御は紙装甲状態なので、対多数にはとことん向いていない。

ウォーロックに転職後は、敏捷性や素の力もそれなりに高くなった。

ジョブセッティング

アトラスの所持している<sup>リンカースキル</sup>転職能力。

十秒間握手した相手の職業を、自身が転職可能なジョブとしてストックすることが出来る能力。

同じ職業の人間でも、持つ素養が違う場合、複数人と握手すること、覚えられるアビリティを増やすことも可能。

本来なら、血族、素養的に無理な能力も大抵覚えることが出来るが、流石に種族的な能力は覚えられず、使えない。

まだ完全に使いこなしているとは言い難い状態。

ストックしたジョブ

『無職』「LV-」

『農民』「LV4」

『ウォーロック』「LV0」

『メイジキラー』「LV0」

覚えたアビリティ

アクションアビリティ

農技

薪を割る「MAX」

マキ割ダイナミック「MAX」（元ネタ：ロマンシングサ・ガ系）

（人としてありえない程に飛び上がり、落下の勢いで薪を割る。  
当然薪は木っ端微塵）（樹属性に特効）

トマホーク投げ「MAX」（元ネタ：ロマンシングサ・ガ系）

（斧をトマホークの如く投げて敵にぶつける技。技名を発言後、  
謎の力によって急激に加速する）

ヨーヨー「MAX」（元ネタ：ロマンシングサ・ガ系）

（トマホーク投げで投げた斧が、なぜか戻ってくるバージョン。  
威力はトマホーク投げに劣る）

大木断「MAX」（元ネタ：ロマンシングサ・ガ系）

（マキ割ダイナミックをパワーアップさせたような技）（樹属性  
に特効）

死んだ振り「MAX」

（ヒグマですら気付かない精度の死んだ振り）

罨作成「MAX」

（時々気紛れで動物が引っかかってくるような罨を作る）

竜言語魔法

なし

隙を狙う

なし

リアクションアビリティ

平伏 「貴族が近くを通ると自動発動」

（あまりに潔くすっぱりした様子に、貴族も穏やかな気分になる）

サポートアビリティ

農業の心得

（農業をする際に必要な知識、最適な方法が自然と思い浮かぶ）  
木こりの心得

（山菜採りや、薪を割る際に必要な知識、最適な方法が自然と思  
い浮かぶ）

なんちゃって狩人の心得

（弓を使う際や、獲物を狩る時に必要な知識、最適な方法が……  
思い浮かばない。でもちよつとだけ命中率が上がったりするかもし  
れない）

アックスマスタリー（元ネタ：ラグナロクオンライン）

（斧を握った際のみ、力が向上する）

ムーブアビリティ

山移動

（山を移動する際の速度が上がる）

森移動

（森を移動する際の速度が上がる）

## 「能力設定」(後書き)

割り込み投稿で新しいのを投稿していたのですが、  
ユーザーページで更新したことにならない上に、  
投稿する時に予約投稿も出来ないもので、  
ややこしいから一番前に移動させてみました。



## 第00話 アカーシャ（前書き）

はじめましての方ははじめまして。すいかという者です。

この作品を投稿しようと思ったのは、息抜きの意味合いと、何か新しく書いてみたいなと思った為です。

やはりこちらなのですが、基本自分で楽しむ為に書いている小説なので、

他の人が楽しめるかというと、無理かもしれません。ですが、楽しめる人が居てくれたら嬉しいですね。

さて、この小説を読む前の注意点として、

主人公は転生系のオリ主。しかも最強系で、原作についても捏造設定有りの、独自解釈もある上に、主人公のチート能力自体が、原作の設定を崩壊してしまうものです。

更にはハーレムやパロネタもありとなっており、色んな人にとって、かなりの地雷要素が満載です。

この作品の主人公は、別段原作崩壊をさせようとは思っていませんが、思っていないだけで、

好きに動くので、崩壊する可能性は大です。

更に、主人公の行動によって、原作キャラが迷惑を被ることもあるかと思っています

それらに嫌悪感を感じる方、受け入れられない方は回れ右をお勧

めします。

ついでに、作者はかなりSS書きとして初心者なので、一度書いた文章を誤字を発見した時や気に入らない時に書き直したり、追加したりすることがあります。

それらが大丈夫という方は、どうぞ宜しくお願いします。

## 第00話 アカーシャ

アカーシャという存在が居る。

アカーシャとは、サンスクリット語で「空」を意味し、また、「その中から物質が現れてくる空間」の意を持つ。そしてそれは、虚空より百千の事物が生じることを意味している。

しかし、この物語において、アカーシャとは、前述したものとは、全くの異なった意味を持っている。

黒い海。

巨大にて雄大、無限ともいえる程に広がるその海に、時折開くその“孔”は、黒い海の中において、尚映える黒い色をしている。

そう、“黒い”海の中ですら、一際映える“黒色”。

その“黒い孔”には、森羅万象、ありとあらゆる事象、存在、可能性、情報が存在して。

そして、ありとあらゆる、あると考えられる世界。即ち、例えば、地球上の、誰もがこんな世界があればいいと思った

ことのあるような世界は全てが存在し得る。

それを可能性世界と呼ぶのだが、この“黒い孔”は、それら全ての世界と、繋がっている。

その“黒い孔”を、

「真理」「根源」「根源の渦」「アカシックレコード」

様々な呼び方で人は呼ぶが、  
確かなことは、その孔こそが、あらゆる事象の発端にして始まりであり、

あらゆる事象の意味であり理由。

それはつまり、ありとあらゆる人間の想像、理解を超える“何か”達、

その全てをすら集約したものであること。

……

そして、黒い海だ。

『根源の渦』たる黒い孔と同じく存在する黒い海。それは、  
魂のスープとも呼ぶべき“何か”であった。

死して、輪廻の輪へと移った魂は、そのほぼ全てがこの黒い海へ

と還る。

当然、世界によって法則は違うので、地獄、天国へと移る世界もあるが、殆どの世界において、魂はこの黒い海へと還る。

そして、海の中に溶け合い、人間ならば、人間として送った一生により、得た人生の記憶、色とでも称するべきそれを、

海に解けることによって黒く染め、途方も無い程に長い年月をかけて色を落とし、

透明の魂に戻り、またあらたなる命として、何処かの世界へと落とされる。

故に、輪廻転生の後に記憶は無い。

これは、例えるならば、

まず、色々な味のジュースを混ぜたものの中に、自分のアップルジュースを混ぜる。

その混ぜたジュースを蒸留する。

さて、この蒸留したものが、アップルジュースである。なんてことがあり得るのか？ ということである。

しかし、これには例外がある。

その例外というのが、即ち、“黒い孔”である。

恐ろしく確率の低いことではあるが、現世にて死に絶え、黒い海

へと還る筈だった魂が、  
黒い孔の中へと入り込んでしまうことがある。

そうなった場合、魂は、黒い孔に取り込まれるか、もしくは、黒い孔にある情報を、逆に取り込み、  
魂としての位階を上げることとなる。

魂としての位階。

人間、亜人族、魔族、神族という風に、異なった種族があるように、人間の魂、魔族の魂、神族の魂は、それぞれに位階が違い、その魂の存在としての“格”とでも言うべきものは異なっているのだ。

例にあげた三つの魂では、人間<魔族 神族の順番に位階が高くなっているのだが。

そして、黒い孔の情報を取り込み、この位階を上げた魂。

この魂は、魂としての格が上がった為、この後、黒い孔より出でて、転生した時に、肉体ではなく、  
魂から記憶を読み込み、肉体へと焼き付けることが可能になる。  
つまり、外付けのハードディスクのような存在となることを可能としているのだ。

故に、黒い孔を通り、転生をした魂は、転生後も記憶を受け継がせることとなる。

しかし、そんな魂の中でも、更に希少なケースが存在する。

それは、“黒い孔”より手に入れた情報により、魂としての異質なる素養を能力という形で、手に入れるというケース。

輪廻の環により手に入れたこの能力を『リンカースキル』と呼ぶ。

根源の神の能力たる、あらゆる世界法則を実現する、『異界法則』、あらゆるものを作り出す、『創造と創生』。

支天の巫女 of 能力たる、属性を自由自在に操る、『属性操作』。如何なるものをもコピーする能力、『複製』。

根源よりあらゆる可能性の生物を召喚する、『自由召喚』。

五眼として、過去現在未来の全てを見通す眼『天眼』、物事の本質を見抜く眼『慧眼』、あらゆる事象を視る眼『法眼』、そして、『肉眼』『天眼』『慧眼』『法眼』の全てを備えた眼『仏眼』。

神の持ち得る力である、六神通『天眼通』『神足通』『天耳通』『他心通』『宿命通』『漏尽通』。

吸血種の『略奪』……更には、あらゆる言語を理解する能力や、一度受けた技を記憶する能力、おまけに『ニコポ』『ナデポ』『カコポ』『鈍感特化』などなど、多種多様。

あらゆる可能性の数だけ、リンカースキルは存在する。

通常の間人としては在りえないような、様々な何らかの能力。それ

こそがリンカースキルである。

そして、このリンカースキルを手に入れ、転生した存在のことを、

『  
アカーシャ  
』

と呼ぶ。

そして、このアカーシャこそが、この物語の主演となる存在なのだ。



## 第00話 アカーシャ（後書き）

我ながら、何という中二病ですか。

テンプレートのな神様チートに、独自設定をつけてやってみました。  
この設定は一応、カエデ・コープルの日々でも反映されていたりも  
します。

これは、どうでもいいことなのですが、カエデは念能力で、黒い魂  
の海の中に沈みながらも、取り込まれないようにしている訳ですね。  
だからカエデはやたらめったら転生の度に苦しんでいるということ  
です。

後、こちらは気分転換に書いているので、かなり不定期になる可能  
性も高く、  
しかも文章がこんな感じで、カエデ・コープルの日々以上に雑な感  
じになるかもです。

## 第01話 リンカースキル

……はじめまして。

僕の名前は、アトラス。

所謂お約束というか、転生者というやつである。

ちなみに、何故自分が転生者であると判ったのかというと、それはやっぱり、前世の記憶があるからなんだけど……。

そのことを自覚出来るようになったのは、つい最近のことだった  
りする。

僕は、比較的裕福……？ になるのか、ガリアという国の、農業  
を営む村で暮らしている。

生まれは貴族………だったら良かったんだけど、農家で暮らしている  
ということもあり、平民である。

捨て子だった僕を拾ってくれた村の人達には、本当にいくら感謝し  
ても足りない。

そういう訳で、まだ6歳だけど、僕も農家の仕事を手伝っていた  
りするんだよね。

まだ6歳だけど、働いていても、世界が違うんだから全くおかし  
くないよ、うん。

だから、例え朝から夜まで、畑を耕したり、薪を割ったり……なんてしても全然平気なんだ！  
本当に、いくら感謝してもし足りないよね。

さて、もう解ってもらえたかな？

この世界には、魔法というものが存在したりするんだ。

とはいっても、魔法を使えるのは貴族のみ、平民には無理だし、貴族の人が、わざわざ農家ばかりの村に来るっていうことも、早々無いことなのか、

僕はまだ見た事が無い。

でも、見た事が無いとはいえ、大人の人達が、皆当たり前のように話しているんだから、

存在しないということは無い筈だと考えてる。

そして、ブリミル、ガリア、トリステイン、ゲルマニア。

そういった単語を何度も聞いていれば、流石の僕でもどういったことなのか、

事情がのみ込めてもおかしくはないということ。

そう、ここは“ゼロの使い魔”の世界、もしくはそれに凄く酷似した世界といった感じの世界なんだと思う。

つまり、テンプレートな転生物といっても過言ではない状況！

……といっても、僕は平民なんだけどね。

だけど、例え小説、あるいはそれに酷似した世界に生まれ変わったからって、

僕は別に、原作介入ひゃっはー！ とか。原作に関わらないようにしよう……怖いし。

とか、そういうことは考えていなかったりする。

僕がやりたいこと、しようと考えていることは、単純なこと。

やりたいようにやる。

折角の二回目の人生。精一杯楽しむ為に！

楽しく生きたい！ その望みの結果、原作に介入することになっても、原作を避けることになっても、そんなことはどっちでもいい。

楽しく生きることこそが、僕の目標なんだ。

だからこそ、僕を拾ってくれた村の人達には、感謝してもし足りない訳だけど、

いつまでもこの村で過ごしているつもりはない。

いつかは、この村を出て行くつもりだ。

……

とはいえ、6歳の僕じゃ、村から出て生きていくのは大変なの

はわかる。

平民だから、身を立てるのが大変というのが大きい。

料理、鍛冶、勉強……何かが秀でて出来る訳でもない。

そんな僕のような人間では、例え転生者であっても、一人で生きていくのは難しい……。

だけど、僕には手段があった。

そう、それは『リンカースキル』というもの。

それこそが、僕が転生した際、記憶を持っていた理由でもあるらしい。

僕は、生まれ変わって、記憶を取り戻した頃、同時に自分が『リンカースキル』を持っていることを知った。

僕の『リンカースキル』の名前は……『ジョブセッティング』。

ありとあらゆる、存在しうる職業を、ファイナルファンタジータクティクス的な職業に変換し、自分の転職可能なジョブとして、ストックする能力……という何とも反則気味な能力だ。

これさえあれば、僕でも魔法が使えるようになるかもしれない！

そして、魔法が使えるということは、身を立てることも出来るようになる可能性が高い！

バラ色の人生間違い無し！

……だと思っただけだ。

但し、この能力には条件があり、ジョブをストックする為には、対象ジョブを持った存在と、10秒間握手する必要がある。というものだった。

さて、ここでの問題は……。

Q・平民に貴族と握手する機会があるでしょうか？

A・ありえん。

という訳で、貴族と握手出来ないのです、魔法はやっぱり使えないってことに……。

握手さえ出来れば……。

と思うのだが、貴族なんて、この農家では見た事も無いので、どうしようもない……。

しかし、それで諦めたら楽しくない！

貴族と握手出来ないのなら、まずは村の人達と握手してみればいいじゃない！

という訳で、訝しげな顔をされたり、  
仕事をサボっていたら、今日のご飯は抜きになるぞ！ と怒られたりしつつ、  
村の大人達全員と握手してみたところ……。

## ジョブ

『農民』

アクションアビリティ

なし

なし

リアクションアビリティ

なし

サポートアビリティ

なし

ムーブアビリティ

なし

……全員農民だった。な、なにを言っているのかわからないと思うが、考えてみれば当たり前だよな。

実際農民な訳だし。

むしろ、この中に山賊とか盗賊、メイジ殺しなんて職業があったら本気で怖いしね。

ともあれ、準備は整った。

とりあえず、ジョブチェンジをして農民になってみよう。

「く「ジョブチェンジ」「農民」

頭の中で、何かがガチリとはまるような音が聞こえる。

そして……。気が付けば、僕は農民になっていた。

いや、姿形で何かが変わった訳じゃない。

だけど、農民になったことが、理屈ではなく、“解った”。

よし！ これで今日から僕は農民だ！

早速ジョブレベルを上げてみよう！



## 「農民」

「畑仕事や、林業関係の仕事をする事で、ジョブレベルが上げられる」

## アクションアビリティ

耕す「レベルで範囲拡大」

水をやる「レベルで範囲拡大」

薪を割る「レベルで切り株も割れる」

マキ割ダイナミック「薪を割る、必須」

（人としてありえない程に飛び上がり、落下の勢いで薪を割る。

当然薪は木っ端微塵）

死んだ振り

（ヒグマですら気付かない精度の死んだ振り）

罾作成

（時々気紛れで動物が引っかかってくれるような罾を作る）

なんとなく射る

（命中率は最高50%）

下手な矢も数射りや当たる「なんとなく射る、必須」

（雨のように矢を射る技。命中率は10%を切るが、射る速度が半端ではない）

## リアクションアビリティ

平伏「貴族が近くを通ると自動発動」

## サポートアビリティ

農業の心得

木こりの心得

なんちゃって狩人の心得

ムーブアビリティ

山移動

何か、最初のほうが牧場物語の改造を彷彿させるんだけど、そんなことよりも……。

「……おい」

マキ割ダイナミックがあるよ！ 最高だよ農民って！ というか誰が持ってたんだよ！

マキ割ダイナミックとか滅茶苦茶したいよ！  
というかそれ、木こりじゃないの！？

コホン、かなり取り乱してしまった。

しかし、本当に誰が持ってたんだろ……マキ割ダイナミック……。

それに、農民と木こりと狩人が混ざってるみたいだけど、これは一杯握手したせいなんだろうか……。

……悩んでも解らない。

何にせよ、やることは決まったみたいだ。

今日から、林業を頑張ろう。薪割り辺りから……。

とりあえず、村の人が用意してくれた小屋に戻ったが、今日は仕事をしていたことが、  
食事はもらえなかった……これは楽しくない。

## 第02話 初めての必殺技

「くられ、イノシシ！……！！」

空高く飛び上がる。ぶっちゃけ怖い！

しかしこれは様式美！

飛び上がった空高く、斧を両手で頭上に持ち上げ、そして

「マキ薪割りいいいい！！……！！」

空中より獲物を目掛け、急降下！

「ダイナミックウ……！！……！！」

『マキ割ダイナミック』

命中！ 轟音を轟かせ、地面深くに斧が突き刺さる！

そして、肝心のイノシシはというと……。

何と6歳児の攻撃によって真っ二つになっている。

どうやって飛び上がったのか、自分でも判らないところが、かなりミステリーだけど、気とか魔力とか、そういったものを使っているのかもしれない。

深く考えると、よく判らなくなるので、考えないことにしよう。

何にせよ、このイノシシを渡せば、ジャガイモのツルを蒸かしたスープが貰える！ やったね、今日はホームラン！

何か間違っているような気がかなりするけど、今はとにかく、薪割りダイナミックが成功したことで胸が一杯なのだ。

ただ……惜しむらくは、

「へへ、斧が抜けない」

ということくらいだろうか。

……

そんな訳で、アトラスことアトラ、六歳児です。

前回から、早いことで数週間。

子供ということで、木のクワで畑仕事を勧められていたものの、目的の為に、毎日のように薪割りをしていった結果、何とか、かなりのアビリティポイント（アビリティを手に入れるのに必要なポイント）を手に入れることが出来て、今の僕の状態はこんな感じになっていたりする。

ジョブ                   ：農民

Aアビリティ：農技（薪を割る「LV5」、マキ割ダイナミック「LV3」、死んだ振り「LV5」）

Rアビリティ：平伏

Sアビリティ：木こりの心得

Mアビリティ：山移動

Aアビリティっていうのは、アクションアビリティの略で、動的な能力のことを言う。例えばゲームでの攻撃系の必殺技や魔法なんかは、

全てがこのアクションアビリティに分類されると言っても良い。

死んだ振りがあるのは……熊とかイノシシとか、亜人とか、凄いの  
が一杯居るんだよ、この村の近くの山には。

次に、Rアビリティというのは、リアクションアビリティの略で、  
動的な能力や行動に対する反応的な能力のことを言う。

例えば、ボールキャッチ、矢避け、カウンターとか、そんな感じの  
能力のことだね。

そして、Sアビリティだけど、サポートアビリティの略で、

これは他のアビリティの強化や補助、さらには肉体自体を強化した  
り補助したりといった役割を持っている。

木こりの心得というアビリティは、木こりとしての仕事をする時に、  
必要な知識とかを得られるアビリティということ。

最後に、Mアビリティだけど、これはムーブアビリティの略で、  
移動の際に反映される能力。といっても、これは殆ど無いから、殆  
どノータッチになると思う。

という感じで、覚えた薪を割るで仕事はかなり捌けたので、余っ  
た時間で山に入って、  
現れたイノシシに薪割りダイナミックを試してみたのだ！

うん、超エグい。

エグいけど、こんな田舎の村だと、動物を捌くのなんて、お馴染  
みのことである。

日本人としてはどうかというところだけど、ガリア人としては、そ  
れが常識。

だから、真っ二つになってしまったイノシシを、斧で押し折った木の枝の葉っぱに乗せて、木の枝を引っ張ることで、村まで持って帰ることにした。

「おまえ、どうやってこんなイノシシを真っ二つにしたんだあ？」

「木の枝から斧を落として……」

なんて言い訳をしたりもしたものの、よくやったな！　と言われ、芋のツルを拭かしたスープレを貰えました。

イノシシ？　何処に行っただろうね？

……うん、深く考えると色々と面倒だし、考えないことにしよう。

それにしても。

いやー。マキ割ダイナミックは凄かったな。

今晚は枕を高くして眠れそうだなーと浮かれ気味に小屋に帰る。



枕とか無いんだけどね。

何にせよ、もうちょっと大きくなったら、村から出る為に、  
今からこうやってアビリティを手に入れていこう！

耕す、水をやる、

罨作成、なんとなく射る、下手な矢も数射りや当たる  
農業の心得、なんちゃって狩人の心得……と、

全部覚えちゃったら、立派な農民の出来上がりだ！

……あれ、僕って農民になりたかったんだっけ。

と、とにかく。マキ割ダイナミックのレベルをもっと上げれば、  
オーク鬼？ とかいうのも狩れて、報奨金がもらえるようになるか  
もしれない。

うん、こういうことを考えるのは楽しい！

それで、報奨金を貰う時に、さり気なく、そう、さり気なく、  
握手をすればいいのだ。

そうすれば、新しいジョブを手に入れられるかもしれない！

という訳で、また明日から木こり生活を頑張ろう！

こうして、目的が決まったので、  
その日は気持ちよく眠りにつくことが出来た。

### 第03話 オーク鬼は群生？

あれから一年。

すっかり遅くなった（？）僕だけど、新しく判ったことがある。

その解ったことというのは、『ジョブセッティング』についてだ。

このジョブセッティングという能力、てっきりファイナルファンタジータクティクス of ジョブチェンジシステムそのまんま、かと思いきや、スキルにはレベルが設定されているものがあり、そういったスキルの場合は、レベルを上げていくことで、効果や範囲が上がったりする。

しかも、それだけではなく、そういったスキルを覚えることで、新しく覚えられるスキルが増えたりすることもあるみたいなんだ。

そう、今の僕は……。

ジョブ                   ：農民

Aアビリティ：農技

（薪を割る「MAX」、マキ割りダイナミック「MAX」、トマホーク投げ「MAX」、ヨーヨー「MAX」、大木断「MAX」、死んだ振り「MAX」、罾作成「MAX」、）

Aアビリティ：なし  
Rアビリティ：平伏  
Sアビリティ：アックスマスター  
Mアビリティ：森移動

という風になっている。

畑仕事関係と、弓関係は修得していないものの、斧使いとしてはかなりパワーアップしたと思う。

という訳で、今日はオーク鬼を倒しに、村を抜け出したのだ。

そうそう、食事の方だけど、最近は、数日に一回は、狩りで獲った獲物を渡している御蔭か、狩りに出るのも公認になって、怒られたりすることもないし、それに、食事の方もかなり豪勢になってきたんだ。

そう！

芋のツルをふかしたのから……いもをふかしたものに！

これは凄いことだったりする。

だって、然程裕福ってこともないこの村だと、畑の作物は、殆どが税金の為に無くなってしまふのだから、僅かに残った形や出来の悪い芋を、大人でもない僕が食べられるなんて、凄く光栄なことなのだ。

うん、大人達がイノシシを焼いて食べてるのなんて、見た事も無いよね……。

……

という訳で、更なるステップアップというか、『系統メイジ』をジヨブセツティングの『ストック』にする為、やってきました。

オーク鬼の住む森へ！

実は、マキ割ダイナミックは、かなり隙が多い。大物相手の大技という感じで、イノシシにすら避けられて、死んだ振りでお茶を濁したことは、数知れない。

そりゃー、空高く飛び上がって、落下の勢いで相手を真つ二つにする技だから、例えば人間相手にやったら、ものすごい確率で避けられてしまうのも仕方ない。といえは仕方ないだろう。

となれば、マキ割ダイナミックでオーク鬼を狩るのは難しいかもしれない。ということになる。

だけど、今の僕には、新しく覚えた技がある。

その一つである『トマホーク投げ』だが、これは、名前の通り、斧をトマホークのように投げて、相手に攻撃をする。遠距離用の技だ。

当然ながら、斧は戻ってこないの、これまた、避けられるとやたらめったら困ってしまう。

ということ、これを使うつもりという訳ではない。

そう、本命の技は『ヨーヨー』という技だ。

これは、斧をトマホーク投げのように投げた際、何故か……戻ってくるのだ。ヨーヨーの如く……。

ぶっちゃけ在りえない。なんてちょっと思ったけど、まあ戻ってくるんだからいいかと思うことにした。

ちなみに、早すぎて戻ってきた斧を受けられない、なんてこともなく、何故か普通にキャッチ出来たりする。

そんな訳で、今日のオーク鬼退治では、『ヨーヨー』を活用して、オーク鬼を倒すことに決めている。

レベルは既にMAXなので、投げている僕にも、何でこんな速度で飛んでるの？ 在り得なく無い？ まあ便利だからだろうか。と思うような速度で飛ぶので、威力的には申し分ない。

さあ来いオーク鬼！ メイジをストックする足がかりにしてやる！

オーク鬼Aが現れた。

オーク鬼Bが現れた。

オーク鬼Cが現れた。

オーク鬼Dが現れた。

オーク鬼Eが現れた。

オーク鬼達はこちらに気付いていない。どうしますか？

「……………」

「<」逃げる

「はあ、はあ、はあ」

ま、まさか、オーク鬼があんなに群れで行動するなんて……。オーク鬼というものについても、村の人の会話から知った程度にしか知らなかったので、こんなことになってしまった。

とはいえ、オーク鬼が常に集団で行動するとも限らない。

例えば、さっきのオーク鬼の集団だって……。

「あ、オレちよっとトイレ行ってくるプー」

「んだよ、出かける前に行っとけよなっプー」

「やだプー、レディの前で下品極まりないプー」

「でへへ、すまんすまんプー」

そう言って、群れを抜け出すオーク鬼A。オーク鬼Aは、集団か



ら離れ、一人森の奥へと入っていく。

……

「全く、昨日は天然もののワインを飲みすぎたップー。

よし、この辺りでトイレの時間ッ……って誰ッー!？」

「オーク鬼よ、貴様に恨みは無いが、十エキューの為に、そしてメイジのストックの為に……。

ここで逝け!」

その言葉と共に、アトラは両手で斧を持ち、振り被りながら、その言葉を宣言する!

「『ヨーヨー』!!!!」

その言葉と共に放たれた斧は、通常ではありえないような加速、回転速度の増加を経て、風を切り裂くが如く、鋭い音と共に、オーク鬼の胸へと吸い込まれていく!

轟音!!!!!

「プギャッ」

凄まじい音と共に、オーク鬼の巨体が揺らぐ。そして……。

「プ、ツプー……。せめて、最後にトイレがしたかった……。プー」

僅かな音を立てて、オーク鬼はその場に崩れ落ちた。

「十エキュールを手に入れた。メイジをストックした」

……

……という風になってもおかしくないと思うんだよね。

問題は、オークがトイレに行く為に、わざわざ集団を離れるのかどうかで……。……。

……無理な気がする。

う、うん。まあこれはどうでもいいか。どっちみち、群れからはぐれていればいいんだし、別にその理由がトイレじゃなくてもね。

よし。適当に隠れつつ、森の中を探して、群れからはぐれているオーク鬼を見つけたら、不意打ちで襲い掛かるう。

そう考えて、森の奥へと、再び入っていった。

……

それは、森の中を、群れからはぐれたオーク鬼を探して、探索している途中のことだった。

オーク鬼の群れ自体は、割とよく発見することが出来た。

それもその筈。どうやらこの森はオーク鬼達の住処になっているようなのだ。

斧を持ったオーク鬼や、鉈を持ったオーク鬼の姿がかなり見られる。ゼ口の使い魔のオーク鬼ってこんなのだったのかな？ うん、……まあいいか。

それよりも単独行動をしているオーク鬼を探さないと……。

そう考えつつ、僕は慎重に探索を続けていたんだけど……。

爆音。

轟音。

爆音！！！

突如として鳴り響いた音の嵐！

耳がおかしくなりそうな程の轟音が、森の奥より鳴り響いている。

僕みたいな低い視点からでも、森の奥に、煙が上がるのが見える。

何が起きているのか？

全然解らなかつたけど、こんな音や煙は、爆弾を使うか、……魔法を使うかでもしなければ、まず鳴り響くはずがない！

そう思った僕は、思いっきりに駆け出した！

そうして走っていると、

何故か、森の中を、僕とは逆方向へと走りぬけるオーク鬼達が居るけど、無視。

オーク鬼達は、僕なんかには構っていられないらしく、一目散に走っていく。

もしかしたら、この爆音を発生させている主から、逃げているのかもしれない。

何となくけどそう思った。

この轟音の発生源。そこに居るのが何なのかは判らない。  
もしかしたら、すごく危険かもしれない。死ぬかもしれない。何が  
起こるのかさっぱり判らない！

だけど、走る！

この轟音の発生源……。そこに、何かすごいのが居るはずだから！

それが、凄く楽しみだから……！

### 第03話 オーク鬼は群生？（後書き）

やはり三人称にするべきでしょうか。

この主人公、細かいことは考えないという設定のおかげで、考察というものをし難いのです。うーん。

## 第04話 次元違いの戦い（前書き）

今回は三人称になっています。

## 第04話 次元違いの戦い

耳がおかしくなる程の爆音、轟音！ 轟音！ 轟音！ 止まない  
轟音の波！

世界の果てまでも埋め尽くしているかのように錯覚してしまう程  
の音の中心。

そこに、一対の存在が居た。

片方は、巨大な体躯。明らかに人間にあるまじき肌の色。その色  
は濃い緑色をしており、

巨大な兜を被り、不思議な装束に身を包んでおり、手には巨大なる  
斧。

そして、巨大と称したその体躯たるや、立ち並ぶ森の木々の頂点  
にすら迫らんとしている程……。

数字で表すとすれば、三メートルは越しているだろうか……この世  
界だと、三百サント、三マイルになるのか。

その存在……を見たアトラの思考は、一瞬、完全に停止していた。

なぜならば、その巨漢。その顔形や造形そのものにこそ、見覚え  
は無かったが、その格好、様相、それに見覚えがあったのだ。

アトラの記憶の中にあったその存在。それは、オークを統べる王た  
るもの……。



それは、アトラが前世でプレーしたゲーム。その中にだけ登場した存在である筈なのだ。

だからこそ、格好にこそ見覚えはあっても、CGと現実の違いから、造形に見覚えがあるという認識にはならなかった。

それでも、アトラには、その存在を称する名称は、ただの一つしか思い浮かばなかった。

その名前は……『オークヒーロー』。

オンラインゲームである、Ragnarok onlineに登場するボスの一体にして、強力な力を持ったモンスターである。

そして、本来ならゲームの中では、初期の頃ならばいざ知らず、最近では一人で太刀打ち出来るような存在ではない（多分）。

だというのに、その“男”は、一人で、人の身を遥かに超す巨大な体躯を持つ、オークヒーローを相手に、戦いを繰り広げていた！

巨大なる体躯を持ったオークヒーローに対し、男の身長は、せいぜいが170センチと言った所だろう。

その体格差たるや、ただでさえ圧倒的なものだというのに、オークヒーローが手に持つ、

巨大なる斧のせいで、余計に際立って見える。

赤子と大人でも、ここまで圧倒的な差としては見えないだろう。

だというのに、男は一步も引かず。荒れ狂う攻撃の嵐を、避け続

けている！

オークヒーローが放つ一撃！

巨大な斧をオークヒーローが振るうと共に、巨大な雷の嵐が荒れ狂う！

その余波が森に火をつける！ 地を焦がし、大地を揺るがす！

先住魔法というべきか、オークヒーローの放った雷、それこそは

『サンダーストーム』

それは巨大なる雷の嵐を呼び込み、大勢の相手を一瞬にして黒こげにしてしまうという程の魔法。

それをオークヒーローは斧を振るうだけで発動しているのだ！

恐らくは、アトラが聞いた落雷の音は、この魔法だったのだろう……。

アトラ自身も、そう思いかけていたのだが……。

違う。

オークヒーローの振り下ろした斧！

その斧が大地を穿った瞬間！ 巻き起こる爆発と、鳴り響く轟音！

オークヒーローが地を叩いただけで、地面が揺らぎ、大気が揺れる！

人の身では、たったオークヒーローの一撃、斧だろうが、雷だろうが、どちらであろうとも、を掠っただけでも、致命傷となるだろう！

しかし、それを男は避け続けて、空を翔ける！

文字通りに、空を蹴って、避ける！ 避ける！ 避ける！

そして、避けて避けて逃げた先……！ 空中高く、オークヒーローの斧が届かないほどに、離れた距離にて、放つ魔法……！

「……………（凍土に漂う氷竜よ）」

男の、アトラの耳では聞き取れない不思議な言語。その言語で紡がれるもの。

その言葉と共に、眼に見えない何かが、男へと集まっていく。それは、魔法を使えない、魔法を知らない、アトラにすらも、明ら

かに違和感を感じさせる光景。

そして、集まった何かは、大気を震えさせる。まるで、男の意思に従うように。

荒れ狂う波、しかしそれは眼に見えず。

オークヒーローは届かぬ相手に、雷を落とそうと斧を振り上げ……！

「……………（その冷たき眼差しで此岸を哀れめ）」

しかし、その直前、詠唱は完了した……！

「『ホワイトミュート』……！！！！」

白、白、白、白。視界を埋め尽くすは白！

世界の全てを白に染めるかのような、圧倒的なその白い全て、その全てが、

男の手の動きに合わせ、一点へと収束していく！

そして……！

収束した先、その先で、オークヒーローは、斧を振り下ろしかけたその姿勢。

その姿勢のままに、凍結していた。

天まで届くかのような氷の柱。その柱の中央、そこに“それ”は存在していた。

凍結し、彫像のように動かないオークヒーロー。

その姿を見て、ようやく男は息を吐く。

改めて容姿を見れば、金色の髪に、不思議な緑のローブを着た男。

男は、中空から降り立ち、地面に落ちている荷物のようなものを拾い集める。

その様子から、それらが男の持ち物であることが伺える。

……そして、それを見ていて、やっとアトラは正気を取り戻した。

魅入られていた。男とオークヒーローの戦いに。

やはり走っても来て正解だったと、そう思い……。気が付いた。

男と握手をすればいいのではないかと？

男が扱う魔法には、どこかで覚えがあったが、とりあえず、ハルケギニアの魔法ではないことは確かだ。

とすれば、今を逃せば、男の“ジョブ”を手に入れることは出来ないかもしれない。

そう考えて、歩き出そうとした瞬間……。

見た。

男の後ろ、その後ろに存在する氷の柱が、“揺れた”のを。

男は、荷物を拾い集めるのに夢中で、後ろの柱が揺れたことになって、気付く筈が無い……！

よりにもよって、オークヒーローは、斧を振り下ろしかけた姿勢で停止しているのだ！

振り下ろした瞬間、男の身体へと、雷の嵐が降り注ぐだろう。

間に合わせる為には……これしかない！

アトラは、思いっきり、両手で斧を後方へと振り被り……そして……！

「『トマホーク投げ』……！！」

戻ることを考えない飛ばせば終わりの一撃！　しかし、だからこそ、『ヨーヨー』よりも威力は高い。

その一撃を、アトラの持てる全力！ その全力で、オークヒーロー  
を目掛けて飛ばした！

相手は動かぬ的！

トマホーク投げのレベルはMAX！

そして、アトラが投げはなった斧は、風を切り、空を切り、その  
切り裂く音をすら置き去りに、  
凄まじい速度で回転しながら飛び……！

「……！」

その飛来に気付いた男が、咄嗟に身を屈めるその横を通り越し……！

轟音！

轟音！

轟音！

大地を揺るがす音を立て、氷の柱が地に落ちる！

それと同時に、斧を、深々と、その身に突き立てられたオークヒーローが、音にならない叫びを上げる！

その叫びを聞いて、ようやく状況に気付いた男は、地面を蹴りながら、身体を後方へと振り返らせた。

痛みにもがき苦しむオークヒーロー。

それを見据え……男は、空へと翔け上がる。

そして、再び空高く。男は……魔法を唱え始めた。



「……………（天駆ける光竜の御力を借り）」

再び、聞き取れない言葉で紡がれる詠唱。

それと共に、やはり、見えない何かが、途方も無い量、男へと集ま  
っていく。

その量たるや、先程の魔法を放った時。その時よりも更に多い。

アトラは、身を震わせ、近くの木々に手を回した。不安。怯え、  
そして期待。

「……………！！（星々を大地に落とさん……！！）」

その巨大なる魔力。それを集めて、男は言の葉に意思を乗せ、  
呪文を詠唱する。

一言一句。先程とは違い、ゆっくりと詠唱されていくそれは、ま  
るで言葉自体に魔力が籠っているかのようだった。

そして、男は、片手を下ろし、指を、……………地面でもがくオークヒ  
ーローへと向けて……………。

「『メテオストライク』!!!!」

瞬間、空が消えた。

暗い闇の中に輝いていた星星の輝き、そして一つとなった月が照らしていたはずの空が、

……消えた。

あるのは黒。

何処か、どこかも解らない場所。

そう、その黒は宇宙……。その宇宙より飛来するもの……。

それは即ち、隕石と呼ばれるものだ。

ゲートを繋げることにより、宇宙の彼方より、流れ行く星を、巨

大なる飛礫と変えて対象へと叩きつける。  
最大の魔法……それが。

『メテオストライク』

降り注ぐ！

大きな穴を穿たれて、その穴より、罅割れて亀裂を作り、当然の如く地面が揺れ、  
更には巻き込まれた木々が倒れていく。

圧倒的な質量。

次々と飛来する“それ”は、如何なる防御も意味を持たない。

轟音！ 轟音！ 轟音！ 轟音！ 轟音！！！！

地形が変わりかねないようなその魔法に、視界が歪む。立っていることすら難しい。それでも、地面を転がってしまえば、どこへ行くとも知れないとばかり、アトラは木を必死で掴む。斧が無いせいで、その身体能力は、かなり落ちてしまっている。  
耐えられない。

もしも魔法に巻き込まれれば……間違いなく死ぬ。それは楽しくないとばかり、ふんばるアトラ……。

しかし、その思いも虚しく、アトラが掴んでいる木も、押し折れ……そして……！

アトラは、空を飛んでいた。

アトラはメイジではない。平民である。ゆえに、空を飛ぶのは、メイジの力を手に入れなければ、不可能な筈だった。

だというのに、アトラは空を飛んでいた。

それもそのはず、これは自分の力で、ではない。

「……すまない。君のおかげで助かったよ」

それは、オークヒーローと戦っていた男。

彼の腕に抱かれ、アトラは……ハルケギニアの空を……飛んでいた。

## 第04話 次元違いの戦い（後書き）

いきなりやつちやった感で一杯という感じですね。

いきなりクロス。しかもクロス先は一部に不評なR a g n a r o k  
n l i n eと、

あれですね。

本当はしょっぱいジョブを手に入れて、アビリティを少しずつ覚えていく展開にしようと思ったのですが、

何故か気が付いたら書いていました。何ででしょう……。。

## 第05話 未知との遭遇

アトラは困っていた。

かなり、という程ではないにしても、困っていた。

何故か……。

それは、本日の昼過ぎのこと、アトラはオーク鬼を討伐して首を獲る為に、

比較的近くの、オーク鬼が住むという森の中へと入ったのだ。

そして、オーク鬼が群生であることを知り、群れよりはぐれたオーク鬼は居ないものかと、

探して彷徨う内、耳を壊しかねないような轟音を聞き、

何か面白いことが起こっているのかもしれないと考え、轟音鳴り響く、その先へと駆けつけた。

そこで見かけた光景。

それは、空想の産物だった筈の、オークの王者。オークヒーローと、そして、一人の男が、戦っているというもの。

アトラの常識を超えた戦い。

オークヒーローが振るだけで鳴り響く轟音、落ちる落雷。

男が紡ぐ詠唱。

身を震わせるような、何かの収束。

そして……詠唱の終わりと共に、

全てを凍りつかせんばかりに視界を染めた白。

そして出来上がったのは、オークヒーローを閉じ込める氷の柱。

勝負を終わったと見た男が見せた隙に、襲い掛からんとするオークヒーロー。

それに気付いたアトラが放った『トマホーク投げ』。

命中し、氷の柱は轟音と共に崩れ落ちた。

そして、オークヒーローの存命に気付いた男が、改めて放った魔法。

それは、隕石を召喚し、敵を粉微塵へと打ち砕く魔法だった。

その魔法の範囲は凄まじく。

離れた場所から観戦していたアトラすらも、巻き込もうとその手を伸ばした。

しかし、それを救ったのは……隕石を呼び寄せた男、だった。

男に抱えられ、空を飛ぶアトラが見たのは、いくつもの巨大なクレーターが出来上がっていく光景。



そして、全てが終わった後、いくつものクレーターを残し、黒い空は消え、再び、一つの月と、星々が瞬く、元通りの空へと戻った。

残されたクレーターの、最も巨大な穴が穿たれた場所。

そこには既に、オークヒーローという存在は居ない、最早完全に粉微塵となってしまったのだ。

そして、それはつまり……

「ぼくのあいぼうがっ！」

アトラが投げつけた斧、それも木っ端微塵になってしまったということに……。

急に奇声を上げたアトラに、びっくりしながらも、男はアトラを地へと下ろした。

そして、男と軽い自己紹介を交わした後に、事情を聞かれ、アトラは、投げた斧が木っ端微塵になってしまっただろうこと、そしてこのままだと物凄く困ることを告げた。

そう、あの斧が無いと、明日からの狩りが難しくなってしまうのだ。

当然ながら、斧が無くなったから頂戴。なんてことは不可能である。

これには楽天的とも言えるアトラといえどもショックが隠せない。

自己紹介で判った名前はエリックであった。

彼は、アトラの事情を聞いて、申し訳無さそうな顔をしながら、どうしたものかと悩んでいるようだった。

何しろ、自分が苦戦させられたオークヒーローを子供でありながら、

悶絶させるような一撃を為せたのだから、

さぞかし高級な斧だったのだろうと考えているのだ。

アトラが、仕事で使う斧とだけ言ったので、起こった勘違いというものである。

という訳で、いつの間にか、悩んでいるのはアトラから、エリックへとバトンタッチをしていた。

というのも、他人が自分の為に悩みに悩む、その光景を見ていると、

悪いことしたなーと思うと共に、段々斧のことは、まあなんとかあるかな。と忘却の彼方へ消えていったのだ。

アトラは、楽天的というよりも、頭がアレなのかもしれない。

何にせよ、思考を切り替えたアトラは、エリックと、どうにかして握手出来ないものかと考えていた。

あれ程の魔法を連発していたのだから、凄いジョブに違いない……  
……といったところだ。

……

とはいえ、これだけ申し訳なさそうな顔をしているのだから、握手しようといきなり言い出したとしても、

「我が家には、見知らぬ人と握手をしてはいけないという家訓が……」

ということでも無い限り、何とかなるんじゃないだろうか、アトラは結論付ける。

ということ……。

「あ、良かったら握手とかどうですか？」

と言ってみたのだが……。

……居なかった。

何故か、目の前で悩んでいた筈のエリックは、その姿を消していた。

逃げられた！？ 握手恐怖症？

とばかり、驚いて辺りを見渡すアトラ。

そして、探し出してすぐに、エリックの姿を発見することが出来た。

ホツと胸を一撫でして、改めて確認すると、

そこはアトラの位置から簡単に見下ろせる位置……。

そう、エリックは、何やらクレーターの中心地点にて、何かをしているように見える。

まだ握手チャンスはある！

そう考えたアトラは、クレーターの中心地点へと向かって……。

降りよう、と思ったのだが、とっても深かったので、男が戻ってくるのを待つことにした。

そして、戻ってきたエリック。

エリックの手には、白い十字の形をした斧が握られていた。

奇しくも、それはオークヒーローが手に持っていた巨大な巨大な斧と同じ形をしているのだが、

あまりにもあんまりな程に、大きさがあまりに違いすぎている。  
現在も、エリックの身体からすると、やや大きく見えるが、少なくともオークヒーローが握っていた大きさとは違いすぎる。

あのクレーターの中で無事だったことも驚きだが、それ以上に驚きなのは、やはり大きさだろう。

……縮んだのかな？ アトラがそう考えていると……。

エリックはおもむろに、白い十字斧を両手で持ち、アトラへと向けて差し出した。

それに首を傾げながらも、当然の如く、アトラはその差し出された手を握り締める。

「何をしているんだい？」

「え？ 握手をしたいのかと思ひまして……」

急に握手をされたことから、どういふことかと不思議そうな表情をするエリックだったが、

アトラは気にせず満面の笑みを浮かべながら、手を握り続けている。

もちろん、何故かしつかりと右手と右手で握手する形で。

「いや、これ売れば、君の仕事に使つていたという斧の代わりくらいは買えるかと思つたんだが……」

「あ、そういうことですか！

ありがとうございます。じゃあ、この斧を薪割りに使わせてもらいますね？」

「薪割り！？……この斧で木こりの仕事をするのかい？　そうかい……そうなのかい……いや、いいけどね。」

……ところで、どうして手を離さないのかな？」

木こりの斧でオークヒーローを悶絶させたこと、そして木こりに見るからに強力な、

十字の斧を使おうというアトラの言葉に、

どこか達観したような表情を浮かべたエリックだったが、改めていつまで握手をしているのかと、アトラに問いかけた。

「いえ、握手は10秒以上はしないとダメって言いますから」

ジョブセティング的には間違いではないので、アトラの能力を発動させる為には、

確かに10秒以上しないとダメなのは確かである。

「この地方ではそういうものなのか……」

当然そんな筈が無い。そして、もう既に10秒が経過したらしい。それを裏付けるように、アトラの意識内に……。

ジョブ

『無職』「LV1」

『農民』「LV4」

『ウォーロック』『LVO』

新たなるジョブの登録が完了したことを告げる。  
チャイムのような音が鳴り響いた。

そして、記載された新たなる職業の名前は、ウォーロック。

ウォーロック。その名前は……アトラにも聞き覚えがあるものだった……。

そう、タクティカルなシミュレーションゲームのあれである。

新しいジョブに感無量といったところのアトラだったが、  
そんなアトラに、エリックは問いかけて来た。

「それで、実は尋ねたいことがあるんだけど、構わないかい？」

「はい。大丈夫ですよ」

とりあえず、ウォーロックについて確認するのは後になりそうである。

「ここは、ヴァレリア島のどの辺りになるのかな？」

「……あーっと」

流石にこれには、アトラも何とも言えない感情を抱いてしまう。  
なぜなら、恐らくエリックは、ハルケギニアに来たばかり……なの

だから。

「ここはガリアという国の南東の方の田舎から数千マイルくらい離れた森……、になるのかな……」

「ガリア？ どこだい、そこは？」

「ガリアはハルケギニアでは大国の名前です。他にはトリステイン、アルビオン、ゲルマニア、ロマリア……というのがハルケギニアの国の全てになります」

エリックの置かれた状況は、アトラには既に判っていることではあるのだが、

転生云々になると、信憑性はかなり低くなる。その為、こういった遠まわしな言い方で判ってもらうしかない。

にしても、どうしてエリックは言葉が通じるのか、不思議なことである。

と、あっさり横道に思考が逸れてしまったアトラだったが……。

「……トリステイン？ アルビオン……ゲルマニア？ どこも聞き覚えが無い……」

当然ながら、エリックには、どの国の名前も、聞き覚えが無いらしい。

一体どういった事情で、エリックはこの世界に来てしまったのか……。



「あの、どうやってここに来たんですか？」

その言葉に、頭を抱え出していたエリックが、ピクリと反応した。

「どう……やって？」

アトラの言葉を繰り返す。

「そうだ。あの悪夢のような宮殿から、ようやく帰還出来ると思って、門を潜ったら……」

「潜ったら……？」

「あの巨大なモンスターが現れたんだ……」

「そう……ですか」

門、というのはアトラにも判らなかったが、恐らくは死者の宮殿だろう場所からの出口とは違ったものだったのだろう。しかし、だとすれば……。

「だったら、よくはわかりませんが、もう一度門というのを潜れば、帰れると思いますよ。」

その門を出た場所は、どこだったんですか？」

そう問いかけた。言っても門がある訳がないと思いつつ、発言をしているのではない。

アトラは、本気で探せば門が見つかるんじゃないかと思っているのだ。

まさしく楽天家である。

しかし、そんな言葉でも、エリックにはかなりの慰めになっただけ……。

「そう、だね。門を探してみよう……色々とすまなかったね」

そう言って立ち去ろうとするエリックを、アトラは咄嗟に伸ばした手で押し留め。

「僕も手伝いますよ」

そう言って、ニコリと笑って見せた。

……ちなみに、十字の斧こと、ライトエプシロンは、アトラが持つても縮むことは無く、かなり重たかった。

もしかすると、持ち主と認めた人間に合わせてサイズが変化するのかもしれないと、エリックが意見し、  
そういえば基本レベルが44くらい無いと装備出来ない武器だったわけ……とばかり、納得したのだった。

とはいえ、一応アックスマスターのおかげか、持つことくらいは出来るようだったが……。

## 第06話 魔法……それは憧れ

「これが……。門なんですか？」

驚いたことに、門はあっさりと見つかった。

門から出てきた場所。まさしくそこに変わらずに存在していたのだ……。

といっても、エリックの言葉での門とは異なった印象を抱かざるを得なかったが……。

というのも、“それ”は……“黒い孔”にしか見えなかったからだ。

しかも、その“黒い孔”は、まるで、絵に描いたように立体感が見えず、入ることが可能かすらも判らない。

だが、エリックはその孔を見つけて驚きの次には喜んでいた。間違っでは居ないということだ。

「良かった……これで帰ることが出来る」

「そう……ですかね」

しかし、本当にこの“黒い孔”が、エリックの望む場所……ヴァレリア島のどこかに繋がっているのだろうか？

ふと持ち上がる疑問。

もしかすると、この黒い孔の先は、どこかの砦で、エリックさん

が孔から出ると、突如背後が何故か爆発して、結果として黒い髪兄妹が揃って助かったりするのかもしれない。

あるいは、この黒い孔の先は、どこかの貝殻をくりぬいたような家々が並ぶ都の奥の祭壇の上層部で、なっがい刀を持って、下に居る女性に向かってダイブを決め込もうとしているロンゲな男性の正面に現れるかもしれないし、

はたまた、出た先は岩の中で、身動きすらとれない可能性すらあり得るのでは「いしのなかにいる」なんてことないだろうか……。

などということを考えて、少し苦笑いを浮かべていると、エリックが怪訝な顔をしていた。

それは、目の前で急ににやけ出したら、怪しく思っても仕方が無いだろう。

「どうしたんだい？」

「い、いやー。本当に見つかって良かったなって思っ

「そうか……本当にありがとう、君の心遣いには感謝の気持ちで一杯だよ」

何とも言えないような表情を浮かべるエリック、だが。

「いえ、いいですよ。ほら、早く入らないと消えちゃいますよ」

確かに、黒い孔がいつまで開いているとも判らない現状、早く入るに越したことはない。

決して、ストックしたジョブの能力を確かめたいとか、エリックが石の中に転移しないものか、なんてことは考えていない。

純粹に心配しているのだ。おそらく、多分。

「そう、だね。

ありがとう……。これはお礼だよ。受け取ってくれ」

そう言つて、エリックは何やら赤くて丸い宝石のようなものを取り出し、アトラへと手渡して来た。

「え？ お礼……。いや、お礼はもう十分受け取りましたよ」

「いや、受け取ってくれないかい？  
オークヒーローだったか……。あのモンスターから助けてもらったこともそうだし、

君は、諦めていた僕を勇気付けてくれて、更には一緒に門を探そうと言ってくれた。

これを受け取ってもらえなかったら、自分で自分が嫌になってしまいそうなんだ」

そう言つて苦笑するエリック。

「そうですか……。じゃあもらいますね」

エリックの発言に、少し罪悪感を感じないでもなかったが、もらえるものはもらっておくべきなので、あっさりと方向転換をして受け取るアトラ。

この宝石が呪いのルビーでないことを祈るばかりだったが、

呪いのルビーだろうが何だろうが、旅に出る時の種銭が出来たとばかり、喜んで受け取るアトラだった。

……

「それじゃあ。本当にありがとう……アトラ君」

「いえ、気をつけて下さい。またこんなところに来ることが無いように……」

「ははは。そうだね。気をつけるとしよう……。では、な」

「はい、それじゃあ……」

手を振り、去っていくエリック。

エリックは……。あっさりと“黒い孔”に飲まれ、姿を消した。

本当に、無事に戻っていれば良いんだけど……。まあ大丈夫かなと、親切にされたこともあるのか、アトラにしては、真面目に考えていた。

「さーて。それじゃあ、さっそくウォーロックのアビリティを見てみようかな」

その真面目さは全く続かなかったが……。やはり、アトラにしては、の真面目さだったらしい。

何はともあれ、アトラは、自分の左手と、右手を繋ぎ合わせる。

……すると、意識下に、浮かぶもの。

「<「ジョブ確認」「ウォーロック」

意識下の操作を終えると同時、浮かび上がる情報。

ウォーロック

「古代の言語に精通し、古代の書物や、教典の解読に尽力する研究者。学者と呼ぶに相応しい魔法使い。

人形使いでもあり、ゴーレムの力を強化する特殊能力を持つ」

「様々な書物を解読、記憶するか、もしくは戦闘経験を積むことでレベルを上げることが可能」

アクションアビリティ

竜言語魔法

×アニヒレーション 「ジョブレベルが足りません」  
(竜言語魔法。炎の雨を呼ぶ)

×マーティライズ 「ジョブレベルが足りません」  
(竜言語魔法。術者の命を犠牲にして死者の魂を呼び戻す。肉体無き者の復活は不可能)

×フォースエンス 「ジョブレベルが足りません」

（相手の弱点となる属性の刃を形成する）

リアクションアビリティ

質疑応答

（質問をされた時に、質問された内容に対し、数時間かけて返答するアビリティ）

サポートアビリティ

ゴーレム強化

（ゴーレムを使役した際や、味方の使役するゴーレムの能力が上昇する）

言語理解

（如何なる言語であろうとも、そこに意思を感じられれば、理解することが出来る。そういう魔法の一種）

ムーブアビリティ

空中歩行

「ウィングリング ウィングブーツ

アイテムがありません」

（道を歩き、階段を昇り降りするかのように、空中を歩行することが出来る）

何とも、凄いというか、アクションアビリティは、現状では一つも使えない有様だったが……。

「うん、とりあえず。死者を蘇生したら自分が死ぬことはわかった」  
アトラからすると、何とも微妙な効果の魔法であるマーティライズ。

しかし、何となくだが、このマーティライズを修得すれば、タクテ



イクスオウガというゲームで、最大の裏技ともいえるものの一角である。“あの”魔法が姿を現すような気がしていた。

系統的には近いものがあるというのも、その思考に拍車をかけている。

ところで、実はアトラは、ゼロの使い魔という物語については、殆ど覚えていなかったりする。

印象的な部分をいくつか覚えていくくらいだ。  
羅列してみると……。

- ・ルイズがサイト召喚。
- ・サイトがラッキースケベを連発。
- ・怒ったルイズがサイトを鞭で調教。
- ・ゾンビパニック。操られたゾンビ達が女王を攫う。
- ・マリコル又はマゾ。

なんとも難儀な場所ばかり覚えている気がするがそれでも、ゾンビが大量発生するイベントがあったことは、印象的だった為に覚えている中に入っている。

そして、“あの”魔法があれば、このゾンビの大量発生が面白イベントに変えられるに違いない。そう思っているのだ。

「しかし竜言語魔法かー、スナップドラゴンとか、かなり黒い魔法だったような……。まあいつか」

スナップドラゴンというのは、前述の通り、術者を剣に変える魔法であり、

その術者のステータス状態によって、剣の性能が変わるという能力を持っていた為、強く成長させたキャラクターを犠牲にして剣を手に入れるというものであった。

現在は表示されていなかったことを考えると、ジョブレベルが上がるか、

他のアビリティを覚えれば浮かび上がるのかもしれない。使ったら人生終わって剣生の始まりだが。

「アビリティポイントは農民とは違って、戦闘でもしないと上がらないんだな。まー狩りでもしてれば上がるのかな？」

とりあえず、適当にやっていたいけば大丈夫だろうと思いつつ、ジョブチェンジを決行することにした。

「<「ジョブチェンジ」「ウォーロック」

カチリと、何かがはまったような不思議な感覚。

理屈ではなく判る。

ウォーロックという職業に、転職したということが……。

そして、意識下で、現在のアビリティをセッティングすることが出来る状態へと以降する。

まるで、ゲームのディスプレイが頭の中に入り込んできたような不思議な状態。

その状態下で……アビリティをセットしていく。

ジヨブ                   : ウォーロック  
Aアビリティ: 竜言<sup>なし</sup>語魔法  
Aアビリティ: 農技(省略)  
Rアビリティ: 平伏  
Sアビリティ: アックスマスター  
Mアビリティ: 森移動

「ふ」……」

……そして、全てをセツトし終えて、改めて自分の状態を認識することが出来た。  
ウォーロックになったことによる変化……。

「あれ……?」

そう、アトラは、転職することによって気が付いたことがあった。それは、身体が、物凄く軽くなっていること。

恐らくは、農民とウォーロックという職業の違いなのだろうが、木こり仕事をする分にも、おそらくはこちらの方が都合が良いだろうと考える。

実際はそんなことは無いのだが(本職じゃないので)、  
ともあれ、転職し立てで気分の高揚しているアトラには、判るはずもない。

そして、転職したところで、改めてウォーロックの、修得可能なアビリティを確認していくと……。

必要なアビリティポイントが、大魔法はやたらめったに多い。それは、農民で一つのAアビリティを10……つまりMAXまで上げるのに必要なアビリティポイントよりも更に多いというもの。しかも、更に言えば、ジョブレベルが足りないというやうで、アビリティポイントがあつたとしても、未だ覚えることは出来ない。これでは、大魔法を連発するのは、遙か先になつてしまいそうだが、  
がっかりするところなのだが……。

「やっぱりゆっくりじっくりしつかり上げるのが基本だよな」

アトラは、普通に楽天的だった。  
ちよつとくらい悩んで欲しいものだが……。

とりあえず、アトラとしては、アビリティポイントならば、うやむやになつてしまつたオークを討伐して、報奨金をもらつたりということをしていれば、  
その内に貯まるだろうと考えている。

そうなると、今度こそ、この世界の魔法使いの魔法を修得できる筈、と  
考えるだけで、楽しくなつてくるのを感じていた。

魔法は憧れといつてもいいようなものなのだから。

とはいえ……このまま、オークを討伐に行く訳にもいかない。  
既に辺りは完全に真っ暗どころか、朝日が差して来ているのだから……。

「とりあえず今日は帰らないとな」

オークの森を抜けて、家に帰らなくてはいけない。

……オーク達は逃げて逃げ、森から出て行った……。なんてことになっていれば安心なのだが、

もしも、戦いの音が止んでいることに気付いて、戻ってきていたら？

……何とも、大変そうな道のりだった。

「まあ、何とかなるかな」

とりあえず、歩き出さないと始まらないとばかり、アトラは、巨大な十字の斧を肩に担ぎ、森へと向かって歩き出した。

そして、立ち去るアトラの背後には、既に“黒い孔”は存在していなかった。

## 第06話 魔法……それは憧れ（後書き）

いきなり凄いチートを出してしまいました。

とはいえ、感想の方でもらったアイディアの通りに、  
当分使えないようにしておく予定です。

## 第07話 今度こそオーク鬼

あれから……数週間余りの時間が流れていた。

アトラは、何とか、群れから離れたオーク鬼を討伐しようと、オーク鬼の森へと入る毎日だったが、まず、あの後暫くはオーク鬼達の数がかなり少なくなっていたように感じられた。

といっても、あの日が初めてだったアトラは、普段がどのくらいか、等ということは判らない為、あくまで、あの日と比べてであるが。

もしかすると、オーク鬼の村がクレーターになってしまったので、再建しようと、補修作業に乗り出していたのかもしれない。

更に、流石にアトラも毎日とは出かけられず、イノシシを狩りに出たり、薪を割ったりという日々だった。

しかしだ、木こりの仕事や、獣狩りは、かなり困難なものへと変貌してしまっていた。

というのも、アトラが手に入れた十字斧、ライトエプシロンは強力過ぎたのだ。

薪を割れば下の切り株まで、まとめて粉碎し、イノシシを狩れば、肉片を飛び散らせる……。あまりにも威力があり過ぎる。

ちなみに、流石に慣れていたつもりでも、飛び散った肉片を初めて見た際、吐き気がしたのは言わずともがなであった。

ともあれ、そのせいで、イモの蒸かしたもののすら、殆ど食べれない。

飛び散った肉片を掻き集めて渡しても、村人は嫌な顔をするばかりであるし。

しかも、ライトエプシロンの持つ効果である筈の、ヒールも使用出来ない。

これに関しては、本来のゲームではLV44が装備制限だったことから、振り回すことは出来ても、使い手にはなれていないのかもしれないと考えた。

ちなみに気付いたのは飛び散った肉片を繋ぎ合わせられないかと考えてだったりするのだが。

そんな状況だが、アトラといえば、毎日振っていればそのうち使えるのでは？ とやはり楽天的に結論付けているのだった。

……

という訳で、今日も今日とて、オーク鬼を狙って、オーク鬼が居る森にまでやって来たアトラだった。

能力は、前回と殆ど変わり無い。

それはそうだろう、モンスターを一体タリとも倒していない上に、農民でない状態で薪割りをしてもアビリティポイントが貯まらないことに気付かなかったのだから。

その為、数日前には、これからは薪割りの前には農民にジョブチエンジして、

サポートアビリティから、アックスマスタリーを外して、木こりの心得をセットしようと思いに決めたアトラが居たそう。



さて、現在のアトラだが……。オーク鬼の森を巡回していた。森移動によって、隠れながらの移動なので、オーク鬼にも発見され難い。言ってみれば豚の化け物なので、確実とはいえないが（豚はトリユフを探す際に用いられるくらい鼻が良い）。

しかし、やはり今日も今日とて、一体で居るようなオーク鬼は発見出来ない。

見つけても、四体以上で集団行動をしているオーク鬼ばかりである。暑苦しいことこの上ない。

とはいえ、アトラにも理由があった。

アトラは、ジョブセッティングにより、強力な斧の技を持っている。それにより、オーク鬼達の王である、オークヒーローにすら大ダメージを与えることが出来たのだが、あくまで、アトラは攻撃力があるだけ、なのだ。

防御力は紙としか言いようが無いし。

敏捷性も、ウォーロックの補正のおかげで、大人よりは高いかも？という程度だ。

これでは、複数を相手取することは難しい。

一応、ヨーヨーで一体を即殺し、離脱するということとは出来るものの、これでは証拠となる首が手に入らない。

オーク鬼の懸賞金を貰う為には、証拠として、腕や足とは違い、一

つしかないもの。

つまりオークの首を渡さなければいけないのだ。

ヨーヨーで即殺しようが、首を切り落とす時間なんてあるはずがない。

となれば、アトラといえども、慎重にならざるをえないのだ。

つまり、いくらアトラであろうとも、このまま、群れからはぐれ、最低でも二体になるオーク鬼を探すのは当然のことであり、とるべき選択なのだ。

「もう十分我慢したはず」

そう、とるべき選択なのだから、アトラが群れからはぐれたオーク鬼を探すのは当然で……おや？

「こんなの全然楽しくないし、そろそろ群れごと狩ってもいいと思うんだ」

……。

「よしいこつ」

アトラは、……どこまでもアトラだった。

と、とはいえ。いくらアトラであろうとも、無策でオークの群れ

に挑む筈が無い。

当然ながら、練りに練った作戦を用意しているのは当然のことだ。

……

「オーク鬼Aが現れた！」

「オーク鬼Bが現れた！」

「オーク鬼Cが現れた！」

「オーク鬼Dが現れた！」

そして、発見したオークの群れ。アトラの眼前には、オークが四体。

アトラがここ暫くの間に発見した中では、最も少ない数字である。

とはいえ、こちらは一人。

対するは四体“も”居ると言えるのだから、しっかりと策は用意してある。

「くられ、『ヨーヨー』！」

と思いきや、木の切れ間から、アトラは躍り出て、いきなり『ヨーヨー』を放った。

アトラの言葉と共に、投げ放たれた十字の斧は、強力な回転と加速をして、オーク鬼へと向かって飛ぶ！

策……？

そしてそのまま、オーク鬼Bの身体を貫通斜めに切り裂きながら昇り、アトラの元へと高速で飛来し、戻る。

これこそが、ヨーヨーという名称の由来だ。

なぜか、トマホーク投げのように投げた斧が、手元に戻ってくる。かなり便利な技なのだ。というか、戻ってこなかったら、その時点で武器無しである。

しかも、高速で戻ってきたにも関わらず、アトラはあっさりとキヤツチすることが出来た。

何故あっさりとキヤツチ出来たのか、どこその顔に傷を作っていた人も受けるのに長い修行が行ったというのに……。

その理由は簡単。そういう技だからである。

ともあれ、戻ってきた十字の斧を手を持ち、アトラはそのままにオーク鬼達に背中を向け、森の中へと走り出した。

オーク鬼Bは、最早、動くことすらもしていない。

「オーク鬼Bを倒した！」

仲間を殺され、頭に血を上らせたオーク鬼達は、当然の如く、猛烈な勢いで、アトラを追いかける。

そして……。

オーク鬼Aが転倒した！

しかも、オーク鬼Aの後に続くように、オーク鬼Dも転倒！

そうになると、残ったオーク鬼Cは、一人でアトラを追いかけることになってしまう。

オーク鬼というのは、意外にもドジっ子属性を持っているものなのか!?

当然ながら違う。

実は、これがアトラの策だったのだ。

わざとポイントをずらして罠を配置して、逃げれば、一体くらいは罠に引つかからずに追いかけてきてくれる。  
くれればいいなあ……。それが、アトラの策。……策?

「罠作成「MAX」」

LVがMAXになり、強力になった罠! そう、その罠とは……。

草の先の部分を結び合わせて作った即席の罠。

簡単に作れる罠でありながら、隠蔽性は高い。引つかった場合に足が止まるのも、この場合は致命的と言える。

……LVがMAXでこれなのかという気もするが、農民の(なんちやって)狩人のアビリティなので、こんなものなのだろう。

ともあれ、アトラは、再び飛び跳ねる。

それを見て、本来ならオーク鬼だろうとも反応くらいはしそうなも

のだが……。

頭に血が上っている為に、気付けない。

すぐに、オーク鬼Cは転倒してしまい、そして……。

「マキ割イイイイイ〜！」

空高く、飛び上がり、頭上に斧を両手で掲げるアトラ。

その目は、一点を見つめている。

即ち……。転倒し、地に伏しているオーク鬼の……！

「ダイナミックウ……！！！！！」

首！

『マキ割ダイナミック』

轟音！

急降下すると共に放たれた一撃が、オーク鬼Cの頭と胴体を泣き別れさせてしまった。

「オーク鬼Cを倒した！」

当然の如く、噴水のように血飛沫が舞い上がるが、それを避けるように、アトラは転がる首を追いかけて、引つつかむ。

首を落としたことによる恐怖、気持ち悪さは殆ど感じない。

既に、飛び散るイノシシの肉片で慣れている為だ。

「よしっ」

そして、後方を確認。

すると、立ち上がった二体のオーク鬼達が、オーク鬼Cの現状を見て、激昂、猛烈な勢いでアトラへと駆け出すのが確認出来た。

オーク鬼の首はごっついだけあって、中々に重い。  
子供のアトラでは、如何にウォロックというジョブのバックアップがあるうとも、持てるのは一体がせいぜいだろっ。

つまり、ここでアトラが取るべき選択は

「<「逃げる」

一択だった。

かくして、オーク鬼の首を掴み、森の中を走るアトラは……。

「やったー！ これでメイジをストックだー！」

浮かれながら、全身で喜びを表現していた。

“オーク鬼の森”の中で叫ぶことにより、背後から追いかけてくるオーク鬼が増えていることにも気付かないまま……。



## 第07話 今度こそオーク鬼（後書き）

やや残酷な描写のようなものがあつたので、タグを追加しておきました。

## 第08話 換金は建前で目的で……

アトラにとって、ある程度開けた街の方まで出て来たのは初めてのことだった。

当然のことながら、おのぼりさんには見られないように、キヨロキヨロと辺りを見渡しながら歩いたり、物珍しいものに気を取られたりする事が無いように注意して歩く。

なんてことが出来る人間ではなく。

（うわー。すつごいなー……。前世から考えればたいしたことのない街なんだろうけど……）

前世でアトラが住んでいた街も、都会という程ではなく、片田舎と称しても違和感が無い程度に寂れた所だった。

しかし、それでもこの街よりは遥かに大きかった筈である。だが、本物の田舎で暮らした今までの年月、そして日本には無いようなある種の活気がアトラには感じられた。

地面に敷いた布切れの上に、所狭しと並べられた食物、薬剤、小物、武器……。

などなど、様々なものは目新しく、アトラの好奇心を満足させたし、

自分の並べた商品を買わせようと呼び込む声は、生活がかかっている者の必死さや、誇り、強さなど、様々な感情が見えた。

といっても、アトラは物珍しげに商品の数々を見ながら歩くのみだ。

当然、子供で、しかも身なりがお世辞にも良くは無いいえ、背中に括りつけたライトエプシロンこと十字斧は、明らかに高価な武器に見えるだろうし、

それに、そもそもこのようなところを歩いているのだから、お金を持っているはずだろうとばかり、声をかけられることもあったが、  
残念ながらアトラはお金を持たない為、笑顔で断るしかない。

といっても、お金が無いと言えば、すぐに見向きもされなくなるのだが……。

さて、アトラだが、実は手に大きな葉っぱで包んだ何かを持っていた。

その何かというのは、当然ながら先日のアレのことである。

大きい葉っぱで見えないように包み隠しているとはいえ、数日以上が経過したオーク鬼の首は、

やや臭かった。季節が悪かったのかもしれない……。

そんなこともあり、アトラがお金を持たないと知ると、むしろとつとどっかに行ってくんないかなー。

という視線すら浴びせられた。

それに、た、たのしくない……。なんて思いつつ、とりあえず換金を済ませようとばかり、

この街でオーク鬼の首を換金出来る場所について聞いてみることにした。

そうすると、アトラが問いかけた商人は、手に持った“臭い臭いのする何か”と、アトラの顔の間を視線が行ったり来たり、数往復した上で、

無いな、と溜息を吐いたりもしたものの、場所については教えてくれた。

この街の治安を護る為に雇われた衛兵達の詰め所……。

つまり、ついにアトラの魔法使いへの道が開かれるのだ！

と思っていたのだが……。

「なんだあ？ ガキがこんなところによお」

「おいおい、誰か失敗したのか？ やいトムス。お前じゃねーのか？」

「馬鹿言つなよ。俺は抜き打ちには自信があるんだぜえ！？」

「「「あひゃひゃひゃー！！！」」」

衛兵？

衛兵？

と、首を傾げなくなるような、下品で粗野で、とっても……大きいです。な人達が詰めている場所だった。

「えーと、オーク鬼の首の換金に来たんですけど」

ここは詰め所で合ってますか？ と思わず言いかけたが、そんなことを言つととってもマイナスに楽しいことになりそうだったので、やはり自粛した。

「はあ？ オーク鬼だあ？」

「おいおい、坊主……オーク鬼つてのはな、その体躯たるや人の数倍！ 耳は尖り、目は深紅、歯は黒！

話す言葉はオレサマオマエマルカジリ。手には血のついたトゲ棍

棒を持つっつていう御伽噺もあるくらいに凶悪なやつなんだぜ?」

お齒黒は別に凶悪な要素じゃないんじゃないかな。

そんな気もしたが、とりあえず話が進まないし、こんな風に

「ああ、それともお使いかあ? でも坊主みてーなのの親がオーク鬼と……ね、ぷふっ」

馬鹿にされるというのも、中々に面白く無いことなので、とりあえず誤解を解くことに決めた。

「ねえ、おじさん」

「おじさん? 俺あまだ10代なんだがなあ?」

「……ざ・生命の神秘」

どう見てもひゃっはーとか叫んでそうな人種なのに十代とは……。ブリミルとはかくも悲劇を演出するものなのか……。

なんてややこしいことを考えるでもなく、なんておっさん臭い十代なんだ。とだけ思い、

アトラは続ける。

「それはいいや。」

あの、おじさんにこの斧がもてますか?」

そう言つて、背中に背負つていたライトエプシロンを持ち上げる。明らかにアトラには不釣り合いな巨大斧。

それを持ち上げると、男達の視線も斧へと向けられる。

静寂。

そして、一斉に唾を飲み込む音が響いた。

ハルケギニアでの主な武装といえば、まず剣となっている。

本来なら剣道三倍段という言葉もある通り、槍は剣に対して上位とされているのだが……。

ハルケギニアで剣が支持されるのは、点で刺すだけでは中々たえない巨大な魔獣や亜人に対する為には、複数人で動きを止めて首を落とすのが確実ということもあるのかもしれない。

刺されても死なないマンガ生物は居ても、首を落とされて死なないマンガ生物は多分居ない訳だし。

他にも、見栄えなどの点で、鎧だけではなく、鞆の装飾等にも凝れる為、貴族層も従者に持たせる為に需要となっていることもあげられるのだろう。

何にせよ、斧という武器は珍しい。

だって斧だもの。

某シミュレーションゲームでも、槍は剣より強く、剣は斧よりも強い。

そして斧は槍よりも強い。

なんて説明を読んだ瞬間、首を傾げたくなるくらいに、斧は武器としては微妙なものなのだ。

重いので、使いにくいし、当然ながら持ち運びも難しい……。

故に、斧をアトラが背負っているのを見ても、変な子供だな……と思わせるだけだっただろう。

普通ならば。

しかし、アトラが背負っていた斧は、眼前に出されてみれば、はつきりと判る。



明らかに普通の斧ではない。

尋常ではない業物、斧を錬金するのにそんな情熱を注ぐメイジが居るのか？　と言いたくもなるが、実際に存在するのだから、居るのだろうと納得するしかない。

そして、そういった思考にいきついていた男の中から、一人がアトラの前に進み出た。

「へえ？　その高そうな斧を俺が持つてくかもしれないぜ？」

男は、ニヤニヤと笑いながらアトラを見る。

笑ってはいるが、隙あらば斧はもーらった、と言いつつに見える。目が笑っていないのだ。

斧に使われている金属は男達にもわからない。ただ、その存在感が訴えかける。

とんでもない価値を持っていることを。

「構いませんよ、持てるんでしたらね」

それに、負けじとアトラもニヤリと笑い返す。

その目は、持てるはずがないと、確信の色が浮かび上がっていた。

「うひひ、マジか……。これで数年は暮らせるぜ！」

その言葉に、喜び勇み、男はアトラの斧へと飛びついた。

子供であるアトラが持っていて、自分に持てないはずが無い。ならば、この斧は俺のもの。

そして俺の生活費だ！　そう考えての行動だった。

しかし……。

「な、なんだこりゃあ！ つぐう！ うううううう」

持てない。

持ち上がらない。

アトラが手を離れたと同時に、男の手では持ち上げ続けることも出来ず、地面に斧は落下する。

それでも男は斧を持ち上げようとしたが、柄を持った手が重力に引かれ、地面と柄の間に挟まれそうになったことで、ようやく手を離れた。

「な、……なんなんだ！？ この斧はあ……！」

当然といえば当然だろう、アトラとて、

アックスマスターリーという斧を持っている間だけ力が向上するアビリティをセッティングしているおかげで、何とか持つことが出来ているに過ぎないのだから。

例えば大人の大人だろうと、聖十字の斧、ライトエプシロンを持つには足りない。

使い手と認められるだけの力量があれば、話は別なのだが、そんなことがあるはずもなし。

「少なくとも、僕には……。」

ほーら、この通りです」

そう言って持ち上げてみせる。実はアトラにも相当重かったりするのだが、片手で持ち上げて見せる。

先程馬鹿にされたのが密かに苛立ちとなっているらしい。

実際、自分がもてなかった斧をあっさりと子供が片手で持ち上げて、茫然自失となっている男に、見せびらかすかのように、斧の柄を持って、ほら催眠術と言いながらゆらゆらと揺らしたりしている。

実は手が引きつりそうなのだが。

……

「疑って悪かったな……それで、そっちの包みか？」

それでも、まだ子供が相手ということで、何か化かされたかのような心境ではあるが、

衛兵（？）達の一人が、責任者を呼びに奥に行き……。

アトラはその間に、謝罪の言葉をもらっていた。

「いえいえ。

そうです、これが本某初公開！ オーク鬼の生首とはこれのことだ！」

その態度に楽しくなってきたのか、ノリノリでオーク鬼の首から、葉っぱを取り去る！

効果音が出そうなくらいに、大々的に、オーク鬼の首が衆目に晒される！

「ひゃっほー！ 生首だぜー！」

「今晚はオーク鍋だ！ 生首シチューだ！」

「小僧！ よくぞやった！」

そんなアトラのノリに、ついてこれる衛兵達は手を上げながら、ノリノリである。

「いや、ワシらは仕事だからたまに見るんだがな」

しかし、それに冷静なツツコミを入れる男……。

そう、彼こそが衛兵達のリーダーである。

来た……！

アトラの目が光る。

衛兵達はどう見ても肉体派だ。

もしこの衛兵達がメイジだとすれば、メイジ（笑）の間違いなのではないかと言いたくなるくらいに。

だが、リーダーともなれば、例えメイジ（笑）だろうが、メイジではあるはず……。

だって責任者なんだもの！

そういう思考で、男達のリーダーを見つめる。

やや白髪が目立つ壮年の男。

しかし、その眼光は鷹のように鋭い。鍛え上げられた体軀はされど、細身を維持しており、インナーマッスルを地で行きそうな容姿だ。当然ながら、インナーマッスルなので、アトラには細身というだけしか判らなかったが。

しかし細身であることがメイジであるということの裏付けではないかと考えられた。

「握手しましょう」

思わず、第一声がそれだった。

勿論、それが通るはずもない。

「握手……？ 坊主、何言ってるんだ？」

訝しげにアトラを見つめるリーダー。

アトラは、まさか握手してもらえないとは……なんて陰険なやつだ！ と思う訳でもなく、

何故握手してもらえなかったのか、握手してもらう為に大事なことは何か、思考を展開させる。先に考えておけよとは言わない約束である。

「ほ、ほら……。オーク鬼の首を今回持ってきたじゃないですか？」

苦し紛れに、とりあえず場を繋ぐ為に言の葉を紡ぎ出す。

「おう、それが？」

問い返され、どう言うか……。珍しく悩む。握手しようと言い続ける以外の方法を考えるのは大変だ……。

「それで、これから贖身……じゃなくて、こちらで換金させてもらうことになりそうなので、お近づきの印に、ってことです」

言い終えて、苦し紛れに言ったものの、理屈としては一応通っているように思えた。

そもそも、オーク鬼というのは、亜人にあたるのだが、人とコミユニケーションをとるのも困難だし、人を襲うことに疑問を感じず、一度襲い掛ければ蹂躪の限りを尽くす、正しく害獣とでも言うべき存在なのだ。

だからこそ、オーク鬼を討伐すれば賞金が出る。

これは、平民に対するアピール以外にも、貴族達とてオーク鬼にいつ襲われるか判らない為だ。

自分達が襲われるとなれば、そのような環境を良しとするはずもない。

その上、仕事をしっかりしているというアピールを国に対してするという側面もあるのだ。

だから、オーク鬼の首を渡せば国からの賞金が出るのだし、首の数から、多くのオーク鬼を討伐した街の詰め所には、国から別途に詰め所に報奨金が出る場合すらもある。

ともなれば、多くのオーク鬼を討伐出来る傭兵の存在は、衛兵達にとってもありがたいことなのだ。

「なるほどな……そんな歳だったのに、中々に気が回る。  
いいだろう、ならば握手だ」

そう言って、豪快に片手をアトラへと向ける男。

それに、内心で自分に喝采を送り、両手にマラカスで小躍りする  
光景を思い浮かべながら、にこやかにアトラは手を差し出し、  
手と手を合わせた。

これ即ち、握手なり。

「長いな……」

「ハルケギニアは一日にして成らず。友好を深める為には時間が大  
切なんです」

「ほう、坊主は中々に深いな……気に入ったぞ。  
なら、一時間くらい握手するか！」

「それは長い！」



だが、十秒は余裕で待てる……。

そして、アトラの意識内に、チャイムのような音が鳴り響いた。

新たなジョブの登録が完了したことを告げる音！

ついに魔法使いになれる……！

期待と共に、アトラは意識内のジョブを……。

ジョブ

『無職』「LV-」

『農民』「LV4」

『ウォーロック』「LV0」

NEW『メイジキラー』「LV0」

何か表示が少し新しくなっているが、それはアトラが能力に慣れ

て来た為だろう。  
ともあれ……。

（やった……！ メイジ……だ？）

……  
確認。

……

……

……  
確認。

……

……  
あれ？

「おい……」

「おう？ どうしたんだ？」

相変わらず握手をしながらではあるが、訝しげな顔をする壮年の男。

「いえ？ ……いえ？」

「何だ。変なやつだな……」

メイジをストックするつもりが、メイジキラーをストックしてしまった。

な、何を言っているのか（後略）。

とりあえず……。

ありえん。

それでも、根のポジティブさが落ち込ませることをさせない。

いやいや、これでメイジになった時には、メイジだけどメイジ殺しでもあることになるんだ。

メイジがメイジ殺しなんて、吸血鬼が吸血鬼ハンターになるようなもんじゃないか！

ん？ それってよくあるような気がしてきた。吸血鬼の吸血鬼ハンターなんてお約束じゃないか！

……いやいや、やっぱり何か違うような。

微妙に混乱したアトラは……。

……

呆然自失のままに換金を終え。

「じゃあな！ また来いよ！」

手に入れたエキュー金貨を数えることもせず、詰め所から外に出ていた。

……

そして、暫く歩いて、ようやく我に返ったのか、

「か、かくにん！」

叫ぶ。

そう、まずは確認だ！

そう考えて、アトラは自分の左手と右手を繋ぎ合わせ、目を閉じる。

そうすると、意識化に浮かび上がるジョブステータスっぽいもの。そこで、選択する。

「＜「ジョブ確認」「メイジキラー」

意識化で操作を行うと同時に、浮かび上がる情報。

メイジキラー

「転職条件を満たしていません」

「転職条件：メイジを一人以上殺害」

「過去に多くのメイジを殺し、メイジ殺しの称号を得た人間だけになれる職業」

アクションアビリティ

隙を狙う

杖を狙う

「石、弓、銃のいずれが必要」

（メイジの持つ杖を狙う。成功すると、メイジはただの人に）（効果：杖喪失）

飛弾・腐った卵

（腐った卵を矢のように相手へと投げる。卵を割れないように、かつ素早く投げる技術は脅威）（効果：戦意喪失）

飛弾・コシヨウ玉

（コシヨウが入った玉を投げつける。調味料は中世だと高価なので、地味に財布に痛い技）（効果：沈黙）

隠れる（ハイド）

（最後に生き残った者が勝ち。メイジから姿を隠す。ディテクトマジックで調べ難そうな場所に隠れるのがコツ。

メイジ以外にも隠られる）

サプライズアタック

（メイジを社会的に抹殺するコンボスキル）

（隠れるを使用中のみ可能。油断しているメイジを奇襲する）

×メイジキラー

「必要な能力が足りません

リアクションアビリティ

サポートアビリティ

メイジキラー

（周囲数メートル以内に居るメイジが、重度なら恐怖心、軽度なら苦手感を感じる）（効果：恐怖）

メイジ判別

（優れた嗅覚はメイジと一般人を見分ける！）

## ムーブアビリティ

現れた情報は、アトラにとっては衝撃のものだった。

（メイジキラーしょぼっ。何というセコさ！　これが平民がメイジに勝つ為に必要な戦い方なのか……。  
ある意味、メイジがメイジ殺しを恐れる気持ちが判ったような気がする）

というか、あの渋い壮年の男が、腐った卵をメイジに投げつけた  
りしていたのか、  
そう考えると、アトラは何だかもの悲しく……。

（見てみた過ぎる！）

なるような人間でもなかった。

現状、全然役に立たないジョブを手に入れてしまった訳だが、と  
りあえずはウォーロック修行中なのだから、大丈夫、問題は無い。

ようやく本当に我に返ったアトラは、メイジはまたの機会を狙う

ことにして、

とりあえず稼いだお金で買い物しようと思った。

（さっきの露店とか面白いもの売ってたし……）

「へへ」

これからすることを考えると、笑みすらも浮かぶ……のだが。

ふと顔を上げて見ると、既に外は暗くなっていた。

それも仕方の無いことだろう、この街自体、アトラの村からはかなり離れた場所にあるのだ。

明け方から歩いてきたとはいえ、そんな時間になってしまっても仕方の無いこと。

となると、露店も店じまいを始めているのが視界に見える。

中世な世界では、メイジはいざ知らず、平民の場合は灯りは中々に貴重なものなのだ。

街行く人達も、心無しか、急ぎ足で歩いているように見える。

幼い子も、家路を急がないとばかり、早足でアトラの横を通り過ぎていくのが見えた。

子供はもう帰る時間なのだろう。平民の子供が遊んだ帰りということもないのだろうか。

「げげ……」



ともあれ、アトラは、その様子に眉根を顰める。  
それもそのはず。稼いだお金でこれから買い物を楽しもうと思った  
ら、商品が逃げていったようなものなのだから。

だが。

どつぽ。

弱り目にたたり目。

踏んだり蹴ったり。

泣きっ面に蜂。

様々な言葉が示す通りに……。

「仕方ない、今日は……そうだ！ 宿をとろう！ 宿なんて初体験  
だよ！ 楽しみだな」

あつという間に取り直したアトラは、先程手に入れたエキュー金貨を数えようと、懷に手を伸ばし、そして……。

「……」

「ない」

そう、無かった。

お金が、無かったのだ。

「……これは無い」

そして、こんな展開は流石にアトラにとっても無かった。

## 第08話 換金は建前で目的で……（後書き）

最近遊んでるゲームがアップデートされたばかりで、  
そっちで遊んでばかりなのですが、何となく思いついたので続き  
を書いてみました。

## 第09話 逃げた先

ねんがんのオーク鬼を倒し、そのお金を換金することにも成功したアトラ。

しかし、本来の、メイジをジョブセッティングに新たなジョブとしてストックするという目的については……。

握手自体は成功した。

したのだが……。

アトラの握手した相手はメイジではなくメイジキラー。

明 だと思つて牛乳を買ったら雪 だったというくらいの違いである。

驚き、混乱したアトラだったが、少し時間はかかったものの、持ち前のポジティブシンキングで、気を取り直すことが出来た。

そして、気を取り直したことで、改めて買い物をしようと表通りに出たのだが、  
気がつけば周囲は暗くなっている……考え事をする内に夜になっていたのだ。

それに、不意に懐を探してみると、換金して手に入れたばかりのお金が無かったりした。

財布を掏られてしまったらしい。

何とも世知辛い世の中である。

とはいえ、それも仕方が無いことではある。  
大金を手に入れたばかりの子供が歩いている。  
こんなものは、カモがネギをしょっているようにしか見えなかった  
のではないだろうか。

それに、先程までのアトラは、あれこれと考え事をしていた。

隙だらけだっただろう。

隙だらけの子供から財布を掏り盗ることなんて、スリにとっては  
お茶の子芥々だったに違いない。  
実際掏り盗られている訳だし。

だが……。それで納得する訳にはいかない。

アトラはポジティブ、というか楽天的な少年だ。

大抵のことは笑って流せるし、苦しいことも楽しいことのように  
感じることも出来る（マゾ?）。

だが、手に入れたばかりのお金を掏られたら、これは流石に楽しくない。

なら、取り返すしかないだろう。

アトラは、どこで掏られたを考えることにする。

考え事をしていても、視界には映っていたはずである。

アトラの記憶力は悪くない。

なら、自分の前で妙な挙動をした人物が居なかったか？

それを思い出せばいいのだ。

（変な人、変な人……変な人、変な人）

どうでもいいが、往来の真ん中で腕を組んで考え事をするアトラは、

間違いない変な子供である。

事実、道行く人達は、アトラをじろじろと注視しながら、

それでいて、アトラと視線が合いそうになったら、慌てて逸らしつつ、通り過ぎていく。

（変な……人？）

そういえば、先程、考え事からアトラが戻ってきたばかりの時のことだ。

自分のすぐ横を、幼い子供が通り過ぎていった。

そう、先程は、家路を急いでいたのだろうと思ったが……。

外はもう真っ暗なのだ。

地球なら有り得る光景だが……、ここはハルケギニア。  
子供がこんな時間に一人で出歩いているのか？

と、自分のことは棚に上げて考える。

いるんじゃない？

結論はあっさり出た。

そついうこともあるかもしれないと。  
アトラは深く考え事するのが苦手なのだ……。



とはいえ、それでも気付くことはある。

でも、と思っただ。

（あの子……何であんな布切れを被って歩いてたんだろ？）

そう、サリーの如く、布切れを身体に覆いかぶせるようにして、歩いていた。

その姿はよくよく考えてみると……。

（そういえば、あの子って、かなり変な人だったなあ）

正確に言えば変な子供ではあるが、アトラの探していた条件と合うことは確か。

やった……！ やった……！

早歩きで、街の出口を目指す。

少女……、幼女と言っても良いような年齢の彼女は、急いで居た。

彼女は、もう一ヶ月程も逃げ回っていたのだ。

彼女にとって、食事として必要とするものは、普通の人とは違っている。

それでも、彼女は人間と同じ食事をとりたいたってしてしまう。

割り切れないから。

だが、幼女がお金を稼ぐ方法なんてものがある筈が無い。

だから、森で獣を狩って、それを食べるくらいしか出来なかった。

あまりにも辛いサバイバル生活。

一ヶ月程前までは、両親の元、安定した食事を供給されていたのだから、

尚更に辛い。

彼女は、見た目ほどに幼くはなかったりもするのだが、

人から見れば少女だし、能力的にも少女と大して違いは無いのだ。

しかし、獲物を獲ることも辛かったが、それ以上に辛かったのは、住居や着る物について、である。

彼女は、住居が無ければ生きていくことが難しいのだ。

今までは、何とか、家を出た際に持ち出した布切れを使うことで、凌いできたが、それも限界。

女の子なので、やはり身体や服の汚れのことも気になる。どうしても現状を打破したいと思ってしまうのだ。

だが、それにはお金が必要だった。

そして、彼女のような少女がお金を得る方法は……盗むしかない。

だが、あくまで彼女は少女の能力しか基本、持ち得ない。

盗む相手が屈強な男などでは、成功させるのは難しかった。

だが、そんな彼女の前に、ネギを背負った力モが現れたのだ。

彼女から見ても、さして身長が変わらないような少年。

その少年が、葉っぱのようなもので包まれたオーク鬼の首を手に、換金所へと入っていくのを目撃した。

(……やるしかないわね)

換金所から出て来た所を狙おう。

そう考えて待っていた。

どうやって掏ろう？

考える。

無理矢理奪うのはどうかしら？

だめね。ないとは思うけど、正義感のある人があの男の子に加勢するかもしれない。

なら、ぶつかった振りをして掏ればいいんじゃない？

出来るかしら……。わたしは掏りなんてしたこと、ないのに。

あの男の子が、どこにお金を持つか、それが大事ね。

あの男の子が出てきたら、まず見るのが大事。

それで、わたしでも掏れそんな場所にお金を持っていたら、ぶつかって振りをして刷る。

そうでなかったら、人気の無いところへ行くのを待って、強引に奪い盗るしかない。

そう考えて、彼女は少し胸が痛むのを感じた。

こんなはずじゃなかったのに、と呟く。

わたしは、人間が嫌いなのかもね。

だけど、まだ人間であることを捨てられない。

そして、人間が生きていくには、お金が必要だから……。

だから。

胸に感じる痛み。罪悪感を感じながらも、待ち続けた。

そして、周囲が暗くなり始めた頃、ようやくあの男の子が、換金所から現れた。

何か考え事をしながら……。

（今から掏ろうと思ってるわたしがこんなこと考えるのは変だけど……、

あの男の子、もうちょっと気をつけるべきよね）

大金を持ちながら、考え事をするなんて、馬鹿としか言いようが無い。

日本の治安が良すぎた為に、転生しても尚、お金に対する気の緩みを持ち続けているのだ。

だが、そんなことを知らない彼女には、抜けた少年にしか見えない。

少女が見守る中、男の子が、何か考え事をしながらも、お金を懐に入れるのが見えた。

あそこなら……ぶつかった振りをすれば……。

そう考えていたら、今度は男の子が、自分の手と手を繋ぎ合わせ

はじめた。

(へん……)

どう見ても、係わり合いになりたくない、変な子供であった。

だが、彼女としては、関わらなくてはいけない。

スリと、その被害者という関係として、ではあるが。

男の子の隙を狙いつつ、機会を待つ。

そして、自然に、自然にぶつかって、お金を掏る……。自分に出来るのかと、自問する。

出来なければ、ぶつかっただけのように見せかければいいと、逃げ道を作ること、自分を後押しして……。

そして、ようやく実行に移そうと決意することが出来た。

自然に、頭の中でその言葉を唱えながら、男の子へと近付き始めた……  
その時。

急に彼は、頭を両手で押さえてうなり出したのだ！

凄く変な子供にしか見えない。

男の子の奇行に、内心引いていた彼女だったが……。

それでも、男の子へと歩いて近付いていく。

頭を抱えるのは止めたようだが、まだ何か考え事をしているように見える。

何かにやにやとし始めたのだから、確かだろう。

これはいわゆる、隙だらけというものはず……。そう考えて近付く彼女だったが……。

その時に見た。

頭を抱える時、急に胸を反らしたことで、懐に入れていたエキュー金貨が落ちかけているのを！

(……落ち、る！)

だから、彼女は、足を僅かに速めて、近付き、そして……。

すれ違いざま、丁度落下しかけたエキュー金貨を掴んだのだ。

……

後は、その場では後ろを気にしてはいたが、



注目を集めない為に、急に走るようなことはせず、歩いて立ち去った

そして現在は、街の門を目指して歩いている所だった。

もうちょっとで逃げ切れる。街から出ることさえ出来れば、後は嫌だけど、数日を森の中で過ごして、それで近くの街に行けば、服だって買えるし、それにちょっとした屋根のある家を手に入れられれば……、と考えながら。

街の門を……出た。

「あは……」

（やった……！ 逃げ切れたのよ！）

彼女は、自分のもくろみが成功した喜びに、快心の笑みを浮かべた。

罪悪感だのはさておき、今は、自分の思い通りに成功したこと。そのことへの喜びで満たされていた。

そして、そのまま、森に入ると、布切れの中から、盗み取った布袋を取り出し……、  
金貨を数えようとして……、そして。

「やっぱり……君だったんだ」

かけられた声。

彼女は、その声に八つとして、振り返る。

するとそこには、彼女がお金を掏り盗った相手の子供。

男の子が、彼女の手持たれた布袋を見つめていた。

## 第09話 逃げた先（後書き）

設定を前に投稿しなおしたので、消そうと思ったのですが、何やら特殊な事情が無い限り、消してはいけないらしく……。仕方なく時間を気にしつつ、無理矢理続きを書いてみました。

口調が原作と違うのは……、アトラと混じってややこしかったんです。

ごめんなさい。

設定については、かなり捏造改変があります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8267n/>

---

楽しく生きる為に

2011年10月6日20時31分発行